

平成 2 6 年 6 月 2 0 日現在

機関番号：3 5 3 0 8

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：2 3 5 3 1 2 7 1

研究課題名（和文）粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立

研究課題名（英文）Ecological pedagogy of art through the infant play with clay

研究代表者

前嶋 英輝（MAESHIMA, HIDEKI）

吉備国際大学・文化財学部・准教授

研究者番号：5 0 2 9 1 8 7 8

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000 円、（間接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：研究の目的は、粘土遊びに関する調査と分析による幼児造形教育の環境モデルを構成することであり、造形活動の環境が幼児の遊びの中で意味や価値として利用されるシステムを生態造形教育学として確立することである。

子供が粘土遊びを始める時の環境の意味を明らかにすることに重点を置いた。保育現場（2400人）に造形環境に関するアンケートを実施し、粘土遊びは重要と考えているが実施できていないこととその理由を明らかにした。レッジョ・エミリアの方法論を取り込むことの有用性を示した報告書によって、粘土場の運営を例に挙げながら、保育者と補助者が観察を重視しながら環境システムを構築する方法について具体的に例示した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is the study of the environmental model of infant education as the ecological pedagogy of visual art, through the investigation and analysis of playing with clay.

I asked nursery schools and kindergartens to complete a questionnaire concerning the environment surrounding those infants playing with clay within the childcare facilities. As a result, it has become clear that nursery teachers believe that playing with clay is a very important activity. However, rarely is natural clay used, and even in the case of toy clay nursery teachers rarely make use of it as a learning aid. Additionally, there were few materials available to aid the adoption of this activity as a subject. The importance of good environmental maintenance and other suitable techniques to the education of infants is, here, demonstrated. Therefore, we will stress independent learning within the environment with regard to creating the foundations of a human's development during infancy.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学、教科教育学

キーワード：幼児造形教育 粘土場 レッジョ・エミリア 生態造形教育学 国際研究者交流

1. 研究開始当初の背景

(1) 新しい教育基本法には、「幼児期の教育が具体的に入り、「良好な環境の整備その他適当な方法」による保育の必要性が示されている。『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』の改訂でも、「環境を通しての教育」の重要性が強調されている。その実現のためには、よい遊び場、よく考えられた指導計画が必要である。教師主導による知識偏重教育では、物事に関する興味関心が深まらないため指示を待つ子が増えているのが現状である。

(2) 保育現場での粘土遊びは、描画遊びに比べると教材として取り上げられる頻度が少ない。また1kg程度の油粘土での遊びが多く、土の粘土は全く使用されないか、あるいは年に一度の特別な活動に限られる場合が多い。しかし造形性触覚性などを考慮して造形素材として粘土を比較すると土の粘土が最も優れていることが分かる。そこで14年前から粘土遊び教室を行ない、平成19年からは高梁中央保育園に粘土場を設置して約300kgの粘土で実践を行ってきた。

2. 研究の目的

(1) 粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立を目的とする。造形遊びを想像、技術、伝達の3要素に分類し、思考力を育む具体的な教育方法を確立する。

粘土遊びの教育目的と指導モデルを提案する。

粘土遊びを動くイメージを伴う造形思考の場とする。

保育現場に粘土遊びの環境を構築する。

(2) 大量の粘土を使用した継続的な遊びの研究によって、幼児の量の認識や量的な表現が、大量の粘土の使用によって変化することを統計分析結果として示す。その上で国内の保育現場の視察や研究協力によって粘土場の環境モデルを示す。

3. 研究の方法

(1) 保育園で粘土場を継続的に経営し、粘土遊びを分類し、レッジョ・エミリア・アプローチを参考にしながら環境による教育を実践し4台のカメラ等で記録を行った。

(2) 先行研究や粘土遊びを行っている園の視察を行い資料の作成を行った。レッジョ・エミリア市とボローニャ市の保育施設を2度訪問した。1200の保育所や幼稚園にアンケート調査を行い、粘土遊びに関する問題点を明らかにして、一般的な園での粘土遊びのモデルを構築した。

(3) 生態心理学の考え方を導入し、環境が与える意味と価値を粘土遊びに結びつけた。

4. 研究成果

(1) 粘土遊びの実践からの成果

本来子どもの活動は、子ども自身で選び決定しなければ遊びとして成立しないという考えに基づいて、土の粘土による遊びを継続的に実践し分析を行った。

粘土遊びの描画表現への影響

「視覚型」「触覚型」の描画の出現が確認できた。声かけのみの導入による描画と粘土場で遊んだ後の描画の最大単体面積比較では、粘土遊び後の方が大きなものを描く傾向が示され(図1)、5歳児がローウェンフェルドの示した型を自由に変更して描画を行う事例を示すことができた。

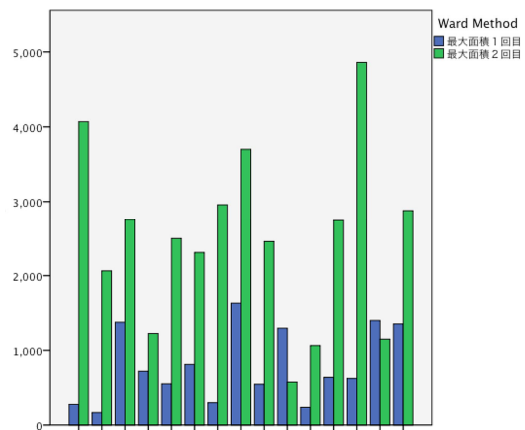


図1 描画の最大単体面積比較

大量の粘土の初期状態

大量の粘土で遊ぶ場合に、粘土の初期状態をマトリクスと呼んでいる。マトリクスは造形的協同的な造形活動に影響を及ぼすことが示された。例えば30cmの棒型粘土を使用した場合、粘土を素材として認識し個人的遊びが始まる傾向があり、3つの座布団型粘土を使用した場合、粘土を場として認識し協同的な遊びが始まる傾向が見られた。

道具の影響

粘土遊びでは、道具の影響が強いことが示された。初めてクレイカッターを提供すると全員が粘土を切る遊びを行い、その後適宜に利用するようになる。粘土板を使用すると大量の粘土があるにもかかわらず平面的な造形を行う傾向が見られた。環境によってイメージが引き出されることが示された。殊に「動いているイメージ」と「静止しているイメージ」に分類される。

(2) 粘土遊びに関するアンケート

粘土遊びの現状と課題

保育所と幼稚園の4、5歳児の担任、1051人からの有効回答をもとに、粘土遊びの現状と課題について分析を行った。

「本年度の粘土を使った指導に満足している」(8.6%)、「自分は土の粘土の保存方法を理解している」(12.3%)であった点は、描画

や工作等の造形遊びに対して、粘土遊びの実践が極めて少ないことの理由として浮かび上がった。

また「レッジョ・エミリア市の保育についてよく知っている」(Yes 2.5%、No 90.8%)という結果は、「見守る保育」としての「プロジェクト学習」が必要とされながらも、保育現場に具体的な実践モデルが提供されていないことを示している。

粘土や造形材料の準備状況

「できれば土の粘土も使わせたい」(71.1%)に対して、「土の粘土を使った造形遊びを年に一度は行っている」(18.1%)であった点からも、粘土遊びの研究の必要性が示された。

道具や材料の準備状況の調査でも土の粘土(7.1%)であり(図2の18)個人用の粘土(72.4%)も週1回以上使用する園(9.6%)と粘土遊びの実践が少ないことが示されている。

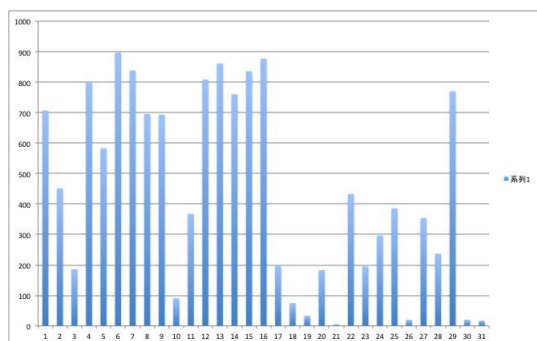


図2 道具や材料の準備状況

「本年度使用した粘土」(図3)では、土の粘土(14.8%)で、紙粘土(49.1%)、小麦粉粘土(39.0%)よりも少ない。

(1個人用粘土、2土の粘土、3紙粘土、4小麦粉粘土、6スライム)

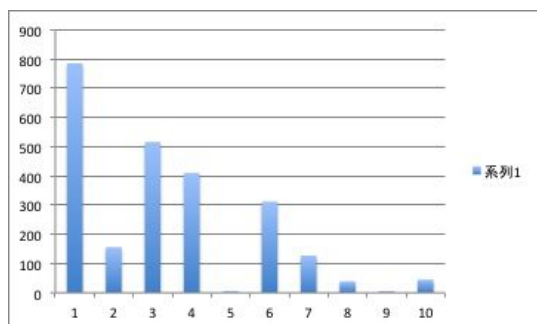


図3 本年度使用した粘土の種類

土の粘土の遊びが少ない理由

準備片付け(32.9%)、粘土管理(63.3%)、服の汚れ(6.8%)、作品置き場(19.4%)と管理が最大の理由となっている。また実施した題材名では、お団子や食べ物等の単体が多いことに対して、実施してみたい題材名にジオラマなど大量の粘土を要するものが上ってきている。

(3) 粘土遊びの環境づくり

粘土場、共同土粘土、共同油粘土、土の粉粘土、その他の粘土について粘土遊び環境の構成方法について詳細にまとめ、一般的な園での実践が可能なモデルとして構成できた。

環境づくりの基本的な考え方として生態心理学のアフォーダンス理論を取り入れ、環境から与えられる利用可能な意味と価値の構成を心懸けた。



図4 粘土場の環境

粘土の特性の比較

	A 土粘土	B 油粘土	C 紙粘土	D 小麦粉粘土
	優れている 良い 劣る			
造形性	A	B	C	D
可塑性	A	B	C	D
ヘラによる造形	A	B	C	D
削りベラによる造形	A	B	C	D
柔らかさの設定	A	B	C	D
へこみの安定性	A	B	C	D
心棒の可否	A	B	C	D
乾燥による不具合	A	B	C	D
使用後の保存法	A	B	C	D
作品としての乾燥	A	B	C	D
心棒を入れた乾燥	A	B	C	D
衣服の汚れやすさ	A	B	C	D
におい	A	B	C	D
安全性	A	B	C	D

協力園等での実践の広がりや社会への遊びの提供を示した。これらの成果は製本し、『粘土遊びに関する幼児造形教育法の確立』(60ページ、2014.3.7)を協力園等527カ所に発送した。またブログによる広報等、ICT利用による情報交換や提供が可能となった。

(4) 幼児造形教育の計画

自主的な遊びに関する先進園の視察と協力により月案、週案、日案のモデルを示した。レッジョ・エミリア市やボローニャ市の施設を訪問し、保育者の育成方法の重要性を確認した。またギブソンやリードの生態心理学の考え方を取り入れることによって、粘土遊びの行為を分析した。成果として、幼児の造形活動を詳細に観察することで、一繋ぎりの遊びの始まりと終わりに粘土へのふるまいに変化を拾い出すことができた。

これを踏まえトンガ王国の幼児教育現場への初の試みとして粘土遊びを導入し、日本での遊びと比較研究を行った。結果として、生活環境が造形活動や手の動き、道具の使い方を特徴的に引き出していることが見出された。

(5) 生態心理学的な粘土遊びの行動分析

野中哲士との研究協力により生態心理学的手法により粘土場での幼児のふるまいとしての行動分析ができた。生態造形教育学としての環境構成研究のアプローチが可能になったと考えられる。

(6) 結論

レッジョ・エミリア・アプローチのような子ども主体の学びの場を作るためには、何より人が大切である。観察と記録による指導だけではなく、観察するための保育者の目を養うことが必要であり、援助するための豊富なアイデアを現実の経験から学び取ることが必要である。粘土場での遊びに見られる自由な造形遊びは幼児造形教育法の研修の場としても重要である。

幼児の遊びの環境の一つとして十分な土の粘土が必要とされており、これに対応できる指導モデルの提示が重要である。

粘土を使った粘土遊びでは「見守る保育」を行うための保育者の位置の確保ができ、幼児の「動いているイメージ」を読みとることができる。

幼児が粘土遊びを始める様子を十分観察することで、利用可能な意味と価値を持った幼児造形教育法の環境設計ができる。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計7件)

前嶋 英輝「0～6歳児の粘土場環境でのふるまい」第63回日本美術教育学会兵庫大会 2014.8.7 関西国際大学 尼崎市

前嶋 英輝、土屋 勇気「幼児のための粘土場の意味と環境設」日本保育学会第67回大会 2014.5.17 大阪総合保育大学 大阪市

土屋 勇気、前嶋 英輝「トンガ王国への粘土遊びの導入」日本保育学会第67回大会 2014.5.17 大阪総合保育大学 大阪市

前嶋 英輝「アフォーダンス理論による幼児のための粘土場遊び」日本乳幼児教育学会第23回大会 2013.11.23 千葉大学 千葉市

Hideki Maeshima, Tetsushi Nonaka, Sanae Kimura「Experience in the Clay Topos reflected in children's drawing」The 17th ICPA(The International Society for Ecological Psychology) 2013.7.8 Estoril, Portugal

Tetsushi Nonaka, Hideki Maeshima「Selection and differentiation of places by toddlers during free play in the Clay Topos」The 17th ICPA(The International Society for Ecological Psychology) 2013.7.8 Estoril, Portugal

前嶋 英輝「粘土場の遊び環境による行動から始まる思考」第71回大会日本教育学会 2012.8.24 名古屋大学 名古屋市

〔その他〕

ブログ:「芸術による教育」
<http://sculturo.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前嶋 英輝 (MAESHIMA, Hideki)
吉備国際大学・文化財学部・准教授
研究者番号: 50291878

(2) 研究協力者

野中 哲士 (吉備国際大学)
木村 早苗 (愛媛県松山市立高浜小学校)
飛永 なを (福井県きのこの森陶芸館)
山崎 正明 (北海道北広島市立北斗中学校)
Paola Cavazzoni (Centro Internazionale Loris Malaguzzi, Reggio Emilia, Italia)

高梁中央保育園 (岡山県)
高梁落合保育園 (岡山県)
ゆうき幼稚園 (広島県)
千里敬愛幼稚園 (大阪府)
大地太陽幼稚園 (北海道)
タブニシリバ幼稚園 (トンガ王国)
ラファエロ幼稚園 (ボローニャ市)
アル・チネマ幼稚園 (ボローニャ市)
カリカント幼稚園 (ボローニャ市)